

I. 導入

おはようございます。前回の使徒言行録の学びでは、ダマスコに向かうサウロに主があらわれたことを話しました。また、アナニアが主に送り出されて、サウロの元に行って彼のために祈りました。今日の聖書箇所に入る前に、この大切なポイントを改めて振り返ってみましょう。

サウロは、イエスが偽のメシアだと考えていました。それで、教会を迫害して潰すためなら何でもしようという思いでした。こういう意気込みで、サウロはイエスに従う者たちを捕らえようとエルサレムからダマスコに向かいました。サウロはイエスを捜し求めてはいませんでした。しかし、ダマスコへの途上で、イエスがサウロを訪ねてくださいました。**使徒 9:3「ところが、サウロが旅をしてダマスコに近づいたとき、突然、天からの光が彼の周りを照らした。」**

私たちの主イエスは、偉大な羊飼いで、失われた者を探し出して救ってくださいます。サウロは、羊飼いの呼ぶ声を無視する反抗的で道に迷った羊のようでした。そのような羊を羊飼いはどう扱うのでしょうか。羊飼いは、そんな羊を見つけ出し、自分の力を行使してその羊を群れに連れ戻そうとするでしょう。この聖書箇所では、イエスが偉大な力と権威をもってサウロの前に現れることで、ご自身が偉大な羊飼いであられることを示しておられます。**使徒 9:4-5「サウロは地に倒れ、「サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか」と呼びかける声を聞いた。 9:5「主よ、あなたはどなたですか」と言うと、答えがあった。「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。」**

ここで、サウロはイエスが偉大な羊飼いであり、すべての主であられることを知ります。また、クリスチャンを迫害することは、イエスご自身を迫害することだということもわかります。教会がこの世におけるキリストの体だからです。サウロは、一時的に視力を失っていたので、ダマスコまで手を引いて連れて行ってもらわなければなりませんでした。三日間、サウロは何も食べずに、断食して祈っていました。そこに、主は信仰深いアナニアという人を送り、サウロのために祈らせました。**使徒 9:17「そこで、アナニアは出かけて行ってユダの家に入り、サウロの上に手を置いて言った。『兄弟サウル、あなたがここへ来る途中に現れてくださった主イエスは、あなたが元どおり目が見えるようになり、また、聖霊で満たされるようにと、わたしをお遣わしになったのです。』**

サウロは、再び目が見えるようになり、起きて洗礼を受けました。そして、食事をして元気になりました。イエスとの劇的な出会い、そして三日間の祈りと黙想を経て、サウロの心は変えられました。サウロは、イエスに従う者として生まれ変わり、聖霊に満たされました。それは、イエスの福音を分かち合う上で役立つ者となるためです。では、その後どうなったのか、使徒言行録 9:19b-31 を読んでいきましょう。

II. 聖書朗読 使徒言行録 9:19b-31, (新共同訳)

9:19 サウロは数日の間、ダマスコの弟子たちと一緒にいて、9:20 すぐあちこちの会堂で、「この人こそ神の子である」と、イエスのことを宣べ伝えた。9:21 これを聞いた人々は皆、非常に驚いて言った。「あれは、エルサレムでこの名を呼び求める者たちを滅ぼしていた男ではないか。また、ここへやって来たのも、彼らを縛り上げ、祭司長たちのところへ連行するためではなかったか。」9:22 しかし、サウロはますます力を得て、イエスがメシアであることを論証し、ダマスコに住んでいるユダヤ人をうろたえさせた。

9:23 かなりの日数がたって、ユダヤ人はサウロを殺そうとたくらんだが、9:24 この陰謀はサウロの知るところとなった。しかし、ユダヤ人は彼を殺そうと、昼も夜も町の門で見張っていた。9:25 そこで、サウロの弟子たちは、夜の間に彼を連れ出し、籠に乗せて町の城壁づたいにつり降ろした。9:26 サウロはエルサレムに着き、弟子の仲間に加わろうとしたが、皆は彼を弟子だとは信じないで恐れた。

9:27 しかしバルナバは、サウロを連れて使徒たちのところへ案内し、サウロが旅の途中で主に出会い、主に語りかけられ、ダマスコでイエスの名によって大胆に宣教した次第を説明した。9:28 それで、サウロはエルサレムで使徒たちと自由に行き来し、主の名によって恐れずに教えるようになった。9:29 また、ギリシア語を話すユダヤ人と語り、議論もしたが、彼らはサウロを殺そうとねらっていた。9:30 それを知った兄弟たちは、サウロを連れてカイサリアに下り、そこからタルソスへ出発させた。9:31 こうして、教会はユダヤ、ガリラヤ、サマリアの全地方で平和を保ち、主を畏れ、聖霊の慰めを受け、基礎が固まって発展し、信者の数が増えていった。

III. 教え

サウロがすぐにしたことが、ここに二つ書いてあります。まず、サウロは信徒の交わりに加わりました。**使徒 9:19b「サウロは数日の間、ダマスコの弟子たちと一緒にいて、」**これは、私たちも見習うべき手本です。私たちには教会の交わりが必要です。とくに、新しい信徒はクリスチャンの兄弟姉妹とともに学び、話し合い、祈ることがとても大切です。信徒の仲間と分かち合うことで、励まされ、力をもらい、守られるからです。



次に、サウロは洗礼を受けてすぐ、出かけていって福音を伝え始めました。**使徒 9:20「すぐあちこちの会堂で、「この人こそ神の子である」と、イエスのことを宣べ伝えた。」**サウロはためらうことなく、すぐにイエスを宣べ伝えました。このサウロの例から私たちは学ぶべきです。

残念ながら、新しい信徒が伝道するのを勧めない教会もあります。「もっと聖書を理解するまで待ったほうがよい」とか、「ノンクリスチャンの友だちとばかりいると、誘惑に負けるかもしれないから、あまりいっしょにいないほうがよい」などと言われるようです。私自身、このようなことが起こるのを見たことがあります。ひとりの女性が、エホバの証人を脱退してイエスを信じ、ある教会で洗礼を受けました。その女性は、イエスが主であり神である、また、救いは行いでなく恵みによるものだという真理を見出し、とても喜んでいました。その教会が後押しをしてあげたなら、彼女はきっとすばらしい伝道者になっただろうと思います。しかし、教会の指導者は彼女を応援しませんでした。伝道する前に、とにかく教会で静かにメッセージを聞くよう勧めたのです。

これは間違いだったと思います。新しい信徒たちがサウロの例に倣って、すぐに信仰を分かち合うよう、勧めるべきだと私は思います。サウロのように大勢の前で説教するような機会や召しが与えられる人ばかりではありませんが、新しい信徒は誰でも、家族や友人、同僚などとイエスの福音を分かち合うことができます。真理を見出し、イエスの愛を知ったなら、他の人に話したくなるのは当然です。教会が少し背中を押してあげれば、多くの新しい信徒たちが説得力のある方法でイエスを証することができるでしょう。

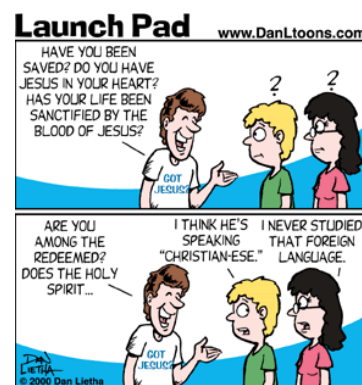


皆さんは驚かれるかもしれませんが、新しい信徒のほうが牧師や宣教師、長老よりも説得力のある証ができる場合が多いのです。伝道の働きのためには、洗礼を受けて間もない人は長年クリスチャンだという人より有利な点があります。驚きましたか。これについて少し考えてみましょう。

もしあなたが長年クリスチャンだったら、友人のほとんどは教会関係の人でしょう。それに、長年クリスチャンだという人は、クリスチャンになる前のことをはっきり覚えていないことが多いのです。もちろん覚えていることもあります。クリスチャンになる前の考え方とか生き方についての記憶があいまいになっています。あることについての考え方をいったん変えてしまうと、以前の考え方やなぜそう考えたかをはっきり覚えているのはむずかしいと、心理学的にもわかっています。

長年クリスチャンの人は、ノンクリスチャンの考え方や世の中に対する見方を理解できない場合がほとんどです。また、教会にずっと来ている間に、クリスチャン用語を使うようになっていきます。このような話し方は、ノンクリスチャンには理解不能です。その一例を紹介しましょう。

www.DanLtoons.com というサイトにあったマンガを見てみましょう。この男性は若いカップルに話しかけています。「あなたは救われていますか。イエスはあなたの心にいますか。イエスの血潮できよめられていますか。」長年クリスチャンの人には、これは簡単な質問でしょう。こういう表現には深い意味が込められています。けれども、簡単に言えば、ふたりがクリスチャンかどうか聞いているだけです。しかし、ノンクリスチャンにとってこのような言葉は意味不明です。このクリスチャンの男性は「贖われていますか。聖霊が・・・」と続けます。けれども何の役にも立ちません。ついに若い男性は女の子に言います。「たぶんクリスチャン語を話してるんだと思う。」すると女の子はこう言います。「そんな外国語習ったことないわ。」



ここで私たちが学ぶべきことは、イエスのことを人に伝えたいなら、相手にわかる言葉を使わなければならないということです。クリスチャンになって30年も40年も経っていたら、クリスチャン用語で話すのが当たり前になっているので、それを使わないのはけっこうむずかしいと思います。クリスチャン同士の会話なら、クリスチャン用語もすばらしいと思います。けれども、教会に行ったこともなく、聖書を読んだこともない人と話をするのには、役に立ちません。もちろんクリスチャンになって30年という人たちのことばかりを言っているのではありません。言語習得能力に長けていて、教会に来て数ヶ月でクリスチャン用語をマスターする人もいます。それはすばらしいのですが、昔からの友だちにイエスのことを話すときは、その人たちがわかる言葉を使うよう気をつけましょう。

なぜ、生まれたばかりと言ってよい新しいクリスチャンのほうが、成長したクリスチャンより伝道に適しているのでしょうか。まず、イエスについて聞いたことのないノンクリスチャンの家族や友人がまわりにたくさんいます。ですから、イエスについて人に話す機会に恵まれています。次に、ノンクリスチャンの人と同じ言葉をまだ話しているので、会話がスムーズに進みます。また、新しいクリスチャンは信仰に燃えています。自分の人生が大きく変わった体験をして、人にそのことを話したいとむずむずしています。クリスチャンになって久しい人たちは、救いをキリストに深く感謝していますが、新しいクリスチャンにとっては、イエスが新しくできた最高の親友ですから、喜びにあふれているのです。



要するに、クリスチャンになって間もない人たち、サウロのように大胆になってください。出て行って、自分の信仰を分かち合ってください。イエスを信じてすぐが、イエスのことを伝える最高のチャンスです。長年クリスチャンの人も、信仰を分かち合わなければなりません。私たちは、新しいクリスチャンの模範となるべきです。とは言え、ときには新しいクリスチャンを自由にさせてあげる必要があります。伝道したいという新しいクリスチャンの気持ちに水を差すようなことはしないでください。むしろ、背中を押して応援し、祈って助けましょう。新しいクリスチャンには

ノンクリスチャンの友人や親類がたくさんいるでしょう。そして、その人たちに説得力のある証ができるのです。ですから、きっと私たちよりもうまく伝道できるはずです。それは素晴らしいことですから、主をたたえましょう。

そのほかにいくつかのことを見ていきましょう。多くの国で、昔の町は要塞のように壁で囲まれていました。日本では、城の周りだけが城壁で囲まれています。中東やヨーロッパ、中国など、たくさんの国では、町全体が壁に囲まれていました。何世紀も前に建てられた壁が今も残っている場所もあります。そのような壁は、たいていが敵から町を守る目的で建てられていましたが、町の中に人を封じ込めるのにも役に立ちました。



聖書の時代、ダマスコも壁で囲まれた町でした。サウロは大胆にイエスを宣べ伝えていましたが、ユダヤ人の中には、サウロを殺そうと企てる者がおり、すべての門に見張りを立てて、サウロが逃げられないようにしました。ところが、城壁には窓付きの部屋がありました。ダマスコのユダヤ人がサウロを殺そうと企てましたが、**使徒 9:25**「そこで、サウロの弟子たちは、夜の間に彼を連れ出し、籠に乗せて町の城壁づたいにつり降ろした。」



サウロはこのような方法でダマスコから逃げ出し、エルサレムに戻りました。エルサレムのクリスチャンはサウロが改宗したという噂を聞いていましたが、最初はなかなか信じませんでした。それで、少し前まで自分たちを激しく迫害していたこの男に会うのを恐れました。



使徒 9:27a「しかしバルナバは、サウロを連れて使徒たちのところへ案内し、」バルナバはサウロを恐れませんでした。それどころか、自分から進んでサウロの友人となり、サウロがエルサレムの信徒の交わりに加わるよう手助けしました。バルナバの紹介があつてやっと、サウロは兄弟として認められました。

バルナバという名は、「慰めの子」という意味です。なんと素晴らしい名前でしょう。私たちは皆、慰めや励ましが必要です。特に、新しいクリスチャンにはそうです。新しいクリスチャンの人は、まわりにあなたのバルナバを見つけてください。あなたを励ましてくれる人、教会のほかの兄弟姉妹に紹介してくれる人です。私が新しいクリスチャンだったとき、近所に住むボブが私のバルナバでした。彼は無口なタイプでしたが、信仰熱心で、喜んでいっしょに過ごしてくれる人だったので、とても励まされました。他の兄弟たちにも紹介してくれました。誰でもバルナバ的存在が必要です。

先輩クリスチャンの人は、誰かのバルナバになる機会を探してください。教会でキリストの愛を現す素晴らしい方法です。あなたが励ます相手はもちろん、あなた自身にとっても祝福となるでしょう。バルナバの役割は、監督したり矯正したりすることではありません。また、質問にすべて答えられる必要もありません。親しみをもって接し、相手の話に耳を傾け、悩みをわかってあげようとするのが、大きな励ましになります。バルナバ的存在の人は、相手の過去にこだわりません。現在についても気にしません。バルナバ役の人は、信仰の目をもって相手を見、キリストにあつてその人に秘められた可能性に目を向けて喜びます。私たちもバルナバになりましょう。サウロに寄り添い、耳を傾け、親しみを持って接し、祈るのです。そうすれば、サウロがパウロになるのを見る日が来るかもしれません。

使徒 9:28-29「それで、サウロはエルサレムで使徒たちと自由に行き来し、主の名によって恐れずに教えるようになった。 9:29 また、ギリシア語を話すユダヤ人と語り、議論もしたが、彼らはサウロを殺そうとねらっていた。」エルサレムでも、サウロはさらにイエスの福音を町中に宣べ伝える働きをしました。けれどもしばらくして、ギリシア語を話すユダヤ人がサウロに腹を立

て、彼を殺そうとしました。ダマスコ同様、サウロの大胆で力ある働きに対して強い抵抗が起こりました。

けれども、ここではまだサウロが殉教者となる時ではありませんでした。それで、兄弟たちがサウロを海辺の町カイサリアに連れて行き、そこから彼の故郷タルソへと送りました。タルソ滞在中のサウロについての記録はあまりありませんが、おそらくそこでも働きを続けていたと思います。タルソはサウロの出身地ですから、地元で親類や昔の友人にイエスのことを話す機会がたくさんあったでしょう。



サウロはエルサレムからダマスコへとキリストの敵として旅しました。しかし、その途上でイエスがサウロにあらわれ、サウロは迫害する者から、歴史に名を残す偉大なクリスチャン、そして伝道者と変えられました。それから、まずダマスコで、そしてエルサレムで、イエスを宣べ伝えました。サウロのあまりの大胆な宣教に、暴力的な抵抗が起きました。そこには、イエスを愛する者の敵である悪魔の手引きがあったに違いありません。ついには、サウロはいったん故郷のタルソに送られます。しかし、使徒 11 章以降で再び登場します。

IV. 結び

使徒 9:31「こうして、教会はユダヤ、ガリラヤ、サマリアの全地方で平和を保ち、主を畏れ、聖霊の慰めを受け、基礎が固まって発展し、信者の数が増えていった。」キリスト・イエスと歩む中で、私たちは時として厳しい試練を経験します。反対や抵抗が起こります。しかし、主を愛し、主の名を呼び求める者には、主が道を備えてくださいます。また、厳しい試練の中で苦しむときも、平和と慰めのときが再び来ると確信することができます。ですから、この世の一時的な悩みに落胆する必要はありません。むしろ、聖霊の慰めを受け、互いに励ましあいましょう。

では祈りましょう。

V. 祈り